

中部の

エネルギーを 築いた



名古屋電灯創設を成功に導いた功労者 丹羽精五郎

丹羽精五郎(1845~1937)は、青年期は幕末維新の動乱期のなか、勤王の志士として全国を舞台に活躍し、壮年期には知事から士族授産事業の処理を託され、名古屋電灯創設実務の中心となった人物である。

勤王の志士として活躍した青年期

丹羽精五郎は、弘化2年、尾張藩士丹羽周太夫の5男として、名古屋伏見町に生まれた。元治元年1月、20歳の精五郎は、征長総督に任ぜられた藩主徳川慶勝に従って芸州広島に出陣し、壮士隊に属して功をあげた。慶応4年1月、佐幕派家臣渡辺新左衛門初め14名が切腹を命じられた青松葉事件に際しては介錯役の任を果たした。同年、都築九郎右衛門に従って、勤王誘因のため東海道を下り、駿府城受取に尽力し、賞典禄25石を賜った。その後、京都に赴いて、華頂宮博経親王(1851~1876)の学友として出仕した。明治元年12月には、友人海部昂蔵(1851~1927)とともに、平戸の儒者、楠本端山(1828~1883)が主宰する猶興書院への遊学が許され、多くの俊才と交わって明治4年4月帰名した。明

治6年10月、米国留学から帰国した華頂宮博



丹羽精五郎
(『名古屋新聞』昭和12年4月14日)

経親王から再度の出仕を求められた。明治6年12月には華頂宮に随従して九州の視察に赴き、鹿児島では旧藩主島津久光等と会談している。明治8年10月には建白書「参議ノ諸省卿兼任ヲ罷ムルノ議」を太政大臣に提出した。明治9年4月華頂宮の許を辞した(この年、華頂宮逝去)。「有司専制」の維新体制に不満を持っていた精五郎は、明治10年1月、大久保利通暗殺未遂事件に連座して捕縛され、懲役7年の判決を受けた。

士族授産事業への取り組み

明治15年10月、帝国憲法欽定による大赦で、精五郎は釈放され、尾張藩出身の友人、田中不二麿(司法卿)や永井久一郎(内務省書記官)らの斡旋で、内務省警保局に職を得た。その後精五郎は、静岡県警部、浜松警察署長を経て、後に愛知県知事(明治18年1

月)となっていた元警保局長勝間田稔(1842~1906)の招きで愛知県衛生課長に就任する。精五郎の着任した明治18年は、尾張藩が長年求めてきた士族授産事業に国の勸業資本金(10万円)の貸与が決まり、具体的な事業化の段階を迎えていた。勝間田知事は、事業が



勝間田稔
(大岡力『地方長官人物評』明治25年10月)

失敗に帰するのを懸念し、金銭で配布するのではなく、相応しい事業を選んで士族に与えるよう指示し、この処理を精五郎に託した。

精五郎の着任は明治18年12月であった。彼が居を定めた住まい(鉄砲町)の前住者は宇都宮三郎(1834~1902)であった。このことを機に二人は肝胆相照らす仲となる。宇都宮は尾張藩出身で、技官の最高ポストである工部大技長となり、退官後は殖産興業に尽力していた。丹羽の相談に答えて、宇都宮は士族授産事業に電灯事業を強く推薦した。当時電灯事業は、東京でスタートしたばかりの最新の事業であった。

幸運だったのは、精五郎の甥、丹羽正道

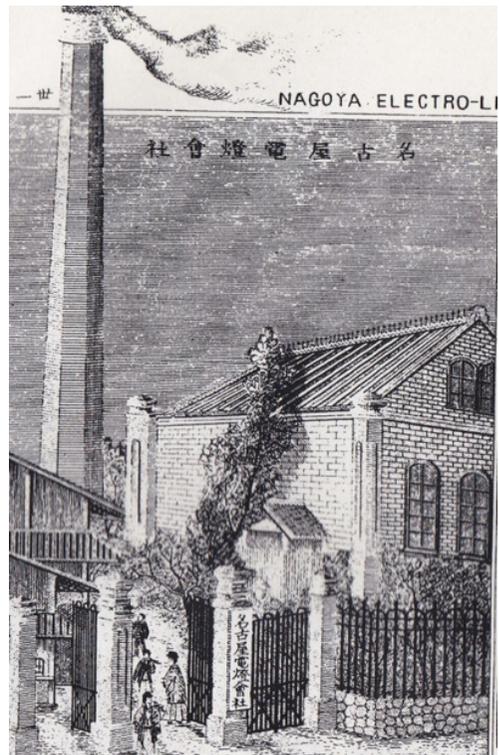


宇都宮三郎
(交詢社編『宇都宮氏経歴談』明治35年2月)



丹羽正道
(丹羽誠一『丹羽精五郎正道伝』平成9年)

(長兄氏任の長男)が、工部大学で電気工学を学んでいたことである。正道は、大阪紡績の電灯工事などを実習として手がけ、たまたま三重県の津と名古屋で行われた電灯点火のデモンストレーションに参画していた。この実



名古屋電灯 南長島町発電所
(『尾張名所図会』明治28年)

演は新聞でも大きく報道され、電灯事業への気運が一挙に高まった。名古屋電灯は、明治20年9月に許可され、工部大学を卒業(同20年7月)した正道は、精五郎の求めに応じ名古屋電灯に入社した。入社後、明治20年10月から翌年4月まで、機械買付けのため欧米に出張し、ニューヨークではエジソンを訪ね、親しく教えを受けている。この出張には、宇都宮の強い推薦により、精五郎も同行した。

明治21年8月には復祿誓願運動の中心になった三浦惠民が名古屋電灯の社長に就き、南長島町に発電所の建設が進められ、明治22年12月に全国5番目の電灯会社として開業した。会社発足後、政府は国会開設を前に勸業資本金の返済を求めた。このとき、久屋

士族就産所の閉鎖に伴う勸業資本金の戻し分を電灯事業に振り向けることで、明治22年3月に返済を済ませており、会社は順調にスタートをきった。



三浦惠民

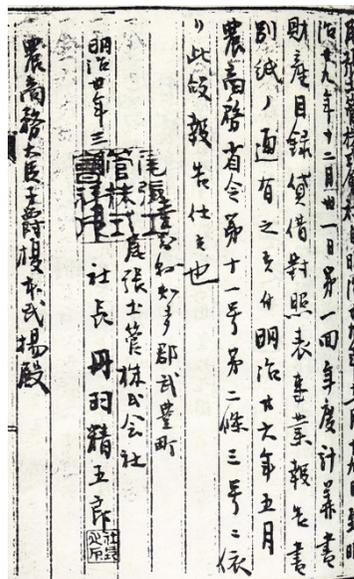
(『名古屋電灯株式会社史(復刻版)』)

名古屋電灯創設の要として

士族授産事業の多くが失敗に終わるなか、名古屋電灯は数少ない成功例とされる。これには丹羽精五郎の果たした役割が大きかった。精五郎は、勝間田知事とは警保局以来の間柄で意志疎通もしやすく、電灯事業の提案者、宇都宮三郎とは信頼関係を結び、技師長となる丹羽正道を親類に持ったほか、親友海部昂蔵(精五郎の夫人は海部の妹)が徳川家の家扶として仕え、徳川家との調整や、士族グループとの交渉には適役であり、名古屋電灯創設にあたり要の役割を果たした。

事業が軌道に乗ると精五郎は事業創設業務を離れ、明治29年には愛知県を退職(52歳)している。その後武豊町に端山忠左衛門等と尾張土管株式会社を創設(明治29年11月)したり、県の伝染病予防委員会委員長などを務め、晩年は徳川町に隠棲し晴耕雨読の生活を送り、昭和12年4月、93歳で逝去している。

士族の心を抱いて生きた生涯であった。



「尾張土管株式会社営業報告書」
(明治30年3月、愛知県庁文書)

(浅野 伸一)